



ポスターセッション

今大会の演題登録は 29 件で、★印の 4 件が優秀発表賞に選ばれ、1 日目の夕刻から催されたイブニングセッションの場で表彰が行われました。

1	瀬尾知子	幼児の体格と親の体格、幼児の年齢・性別の関連 ―子どものカウプ指数と親の BMI の検討―
2	戸次佳子	子どもの協調運動発達と QOL との関連
3	佐藤朝美	小学校低学年を対象としたイラスト提示と文字送り機能を備えたデジタル絵本の開発と検証
4	木村志緒	食に関する指導の在り方の研究 ―小学生における食事のマナーの習得度調査結果より―
5	杉尾直子	食に関する指導の在り方の研究 ―児童における給食供給量と体調等との関連性―
6	阿萬千穂	食に関する指導の在り方の研究 ―大学生の献立作成における自己評価からの一考察―
7	長田有子	iPad アプリを使用した療育課題の実践
8	西川ひろ子	囲碁を通じた保育所と地域との連携の実践による幼児の数量感覚の発達
9	彦坂宗之介	乳児の睡眠判別法の精度検証
10	倉島周平	園児見守りシステムに向けた行動識別精度向上の検証
11	岩本祐一	学生が子どもと遊びの中で得たコミュニケーションの学び
★12	渡辺富夫	PEKOPPA Toy Robot in a Scenery of Speaker ― Listener Communication in Neurotypical and Autistic Children
13	大森賀乃	米国における人種の多様性に対する児童虐待の頻度と傾向 (2012 年データ)
14	川島亜紀子	夫婦コーピングの検討：子どもの夫婦間葛藤時の情緒安定性に着目して
15	白坂正太	プレーワーカーの心構えに関する一考察 ―福岡市「わいわい広場」を事例として―
16	佐藤桃子	音声玩具を用いた遊びが 3～4 歳児の「ひらがなの読み」習得に与える効果
17	伊藤理絵	乳児期初期の笑いに対する大人の反応
18	内田直人	「カルピス」の共同作製・飲用と絵本の読み聞かせを介した世代間交流の取り組み
19	鈴木 勲	ウガンダ・カコバ地域の子どものために届け私たちの自作絵本 ―絵本制作とビデオ通話をとおした読み聞かせ活動から絵本の持つ力を分析する―
★20	石川翔吾	行動観察 Web システムの開発 ―高齢者ケア技法ユマニチュードの子ども研究への適応―
21	佐藤佳淑	乳児の「甘え」泣き場面における母子相互作用の発達的变化
22	河村智洋	中高生のスマートフォン利用実態調査
23	鈴木祥子	複数言語環境で育つ子どもの日本語習得 ―国リハ式<S-S法>言語発達遅滞検査より
24	生駒 忍	子どもの放課後の過ごし方の 2 側面の 3 年間―自己評定データによる追跡の試み―
★25	菅原ますみ	子育て期の夫婦の QOL ―生涯発達におけるクオリティ・オブ・ライフと精神的健康 (7) ―
26	松本聡子	子どもの生活の質と生活習慣の関係 ―生涯発達におけるクオリティ・オブ・ライフと精神的健康 (8) ―
★27	朝倉民枝	小児医療施設におけるタブレット端末アプリを活用した物語づくり活動報告
28	寺井 薫	新入 0 歳児が新しい場に慣れる状況を実践から学ぶ
29	平沼晶子	Healthy Start Program における子育て家庭への支援 ―ハワイ島東部での取り組みから学ぶこと―

優秀発表賞を受賞したポスター

PEKOPPA Toy Robot in a Scenery of Speaker – Listener Communication in Neurotypical and Autistic Children

Irini Giannopulu¹, Valérie Montreynaud² & Tomio Watanabe³

(¹ Pierre & Marie Curie University · ² Centre of Medical Psychology · ³ Okayama Prefectural University)

Atypical neural architecture causes impairment in communication capabilities and reduces the ability of representing the referential statement of other people in children with autism. During a scenery of “speaker-listener” communication, we have analyzed verbal and emotional expressions in autistic (n=20) and neurotypical children (n=20) aged 6 years. The speaker was always a child, the listener was a human or a toy robot named PEKOPPA which reacts to speech expression by nodding only. We defined three conditions: “rest condition”, “with human” and “with robot”. The heart rate (bpm), the number of words (nouns and verbs) and the emotional feeling were recorded. The results have shown that the mean heart rate of neurotypical and autistic children was similar in the “rest condition”. Compared to the heart rate of neurotypical children, the mean heart rate of autistic children was lower when the interlocutor was the human. The mean heart rate of autistic children increased and didn't differ from that of neurotypical

children when the interlocutor was the robot. The mean number of words was higher when the autistic children had the robot as interlocutor than when the interlocutor was a human. The quasi opposite configuration was observed for the neurotypical children. The emotional feeling reported was higher “after” than “before” the interaction with the robot for autistic children but it didn't vary for the neurotypical children. Although both groups performed the task, everything happens as if the robot could allow autistic children to conceptualize a multivariable verbal and nonverbal equation, encoding within his/her brain, and externalizing into unconscious emotion (heart rate) and conscious verbal speech (words). Such a behavior appears to indicate that minimalistic artificial environments such as toy robots could be considered as the root of neuronal organization and reorganization with the potential to improve brain activity.

行動観察 Web システムの開発

一高齢者ケア技法ユマニチュードの子ども研究への適応一

石川翔吾・竹林洋一（静岡大学大学院情報学研究所）

四人に一人が高齢者である超高齢社会に突入し、認知症への対応が社会的な課題となってきた。このような背景の下、認知能力が低下した高齢者をケアするために開発されたケア技法ユマニチュードが注目されている。ユマニチュードとは、「ケアする人とは何か?」「人とは何か?」という哲学の下に、「見る」「話す」「触れる」「立つ」の四つの基本技能から成り立つ包括的なコミュニケーション技法である。ユマニチュードは認知症高齢者に限らず、子どもから高齢者までの幅広いコミュニケーションの場を対象としている。我々は、種々の現場におけるユマニチュードの効果や有効性を表現・分析し、「人らしいコミュニケーション」のモデル化を目指している。

本発表では、映像を手がかりにコミュニケーション技

法の表現・分析を行うための Web ベースマルチモーダル行動分析ツールを開発し、認知症高齢者と子どもとのコミュニケーションの比較を行った結果について示す。開発したツールは、見る・話す・触れるという三つの観点から映像に対して行動記述した結果を基に、行動の意図、行為間の関係性、行動の効果などの解釈を積み上げていく段階的な行動分析フレームワークである。分析結果より、認知レベルに応じて、「見つめ合う」距離感を調整し、「触れる」面積を広く、ゆっくりとポジティブな「話しかけ」を行うなどのコミュニケーション技法は、母子インタラクションにおける働きかけとの共通点が見出された。

子育て期の夫婦の QOL

—生涯発達におけるクオリティ・オブ・ライフと精神的健康(7)—

菅原ますみ¹・松本聡子¹・酒井厚²・後藤憲子¹・高岡純子³・孫怡¹・吉武尚美¹

(¹ お茶の水女子大学・² 山梨大学・³ ベネッセコーポレーション)

両親の生活の良質さ(クオリティ・オブ・ライフ)は、家庭環境を共有していることに由来する直接的な経路とともに、ペアレンティングの良質さを經由する間接的な経路によって子どもの健やかな発達に影響力を持つものと予想される。今回の報告では、妊娠期から成人期までの異なる年齢段階の子どもを持つ世帯を対象とした2つの調査(調査1:初めての子どもの持つ妊娠期~2歳までの夫婦ペア、調査2:児童期から成人期までの様々な年齢の子どもを持つ夫婦ペア)から、子どもの年齢段階によって夫婦の生活の良質さがどのように推移するのか横断的な考察を試みる。

夫婦の生活の良質さや健康さを評価する指標として、国際連合世界保健機構(WHO)が定義する「健康」(身体的、精神的、社会的、環境的に良好な状態にあること)の概念に沿って作成された WHO QOL-26 によって夫・妻

それぞれを対象に測定した。対象とした子どもの年齢は、調査1では、第一子の妊娠中(妻=1,635名・夫=1,259名)・0歳(妻=1,704名・夫=1,234名)・1歳(妻=1,191名・夫=841名)・2歳(妻=808名・夫=544名)である。調査2では、児童期(小学校5年生、妻=329名・夫=252名)、青年期(高校生・大学生、妻=431名・夫=301名)、成人期(23歳~26歳、妻=150名・夫=109名)である。子どもの年齢段階ごとに実施された重回帰分析の結果から、両親の QOL には世帯年収・教育歴・性別等の家庭の社会経済的要因が有意な影響を及ぼすとともに、妻の身体的側面の QOL を除き、どの側面も妊娠中より出産後の子育て期に低下する傾向にあることが認められた。また夫婦間の QOL にはどの子どもの年齢段階においても有意な相関がみられた。

小児医療施設におけるタブレット端末アプリを活用した物語づくり活動報告

朝倉民枝¹・楠木重範²・於保可那子²

(¹ 株式会社グッド・グリーン・² NPO 法人チャイルド・ケモ・ハウス)

長期入院中の子どもたちは、闘病の身体的な負担のみならず、非日常な環境の中で精神的負担までも強いられている。本報告では、小児医療施設におけるタブレット端末アプリを活用した物語づくり活動について考察する。

主な活動の拠点は、2013年4月神戸に開設された国内初の小児がん専門治療施設である。医師のいる診療所と患児が家族とともに暮らせる住居がひとつの建物内にあり、家族一緒に暮らしながら治療を受けることができる。とはいえ、子どもたちにかかるストレスは計り知れない。そんな闘病中の子どもたちを対象に、物語づくりの活動を次のステップで行っている。1) キャクターやアイテムを配し物語をつくる。2) 声を録音しデジタル絵本を完成させる。3) 出力し紙の絵本を製本する。4) プロジェクターで上映し互いに鑑賞する。この流れを、その日の体調をみながら、一部を省いたり数日に分けるなどして実施する。

子どもたちは、物語を作ること自体を大いに楽しむ。そして、物語として外化することで、様々な気持ちを解放することができる。また、できあがった絵本を、家族や院外の友人へ贈り喜んでもらえることで、前向きな気持ちになれる。一方、保護者にとっても、作品を通して子どもの心の内を垣間見ることができる。

ときには、大学附属病院の分教室などへもでかけている。「学校は社会への橋渡しである」分教室の先生の言葉である。ICTを活用すれば、病院間を繋ぎ院内学級を持たない小規模な病院にもオンライン授業を届けることができる。入院中の子どもと元々通学していた学校の所属学級とを繋いで一緒に学ぶということも実現したい。それは、患児の側のみならず、所属学級の子どもたちにとっても意味ある活動になると考える。物語づくりの活動を、点から線へと繋げていきたい。